

小学校段階における「描く」力をつける効果的トレーニング

高木 愛
(学校教育)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

Effective Training to “Draw” in the Elementary School Stage

Megumu Takagi

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本研究では、技術的な指導を避ける傾向にある図画工作教育が内包する問題点を解決するために、図画工作における児童一人一人の能力に応じた技術指導の必要性を提起した。また、エドワーズの論考を手掛かりに、小学生を対象に表現の基礎的技能の一つである「描く」力をつける描画トレーニングを実践し、有効な技術指導、「描く」力をつけることで自信を持たせることの必要性、そのための教師の効果的な指導について言及した。

キーワード 小学校段階 図画工作・美術 「描く」力 技術指導 描画トレーニング

1 目的

美術教育は、表現するよろこびを味わわせ、美しさを感じる心を育てることで、豊かな人間性を養うことを目標にしている。この目標は美術教育の懐の深さを、言いかえれば曖昧さを表している。理想的であるが抽象的であり、目標を達成するための具体的な手立てについて詳しく示されていない。そのため、学習内容について他教科と比較して指導者に任される部分が多く、それぞれの教員の考える子どもにつけたい力が、主観的に設定される場合も考えられる。

現行の学習指導要領においては、指導の留意点として、教師主導で技能を身につけさせるものではなく、児童・生徒が発見したり気づいたりして表現することを大切にすることが明示されており、技術指導を極力抑える風

潮が主流となって久しく、その傾向は小学校課程においてより顕著である。このように図画工作・美術教育の方向性が舵取りされてから、児童・生徒の「描く」力とは、自分の描きたいように描く「自由な表現」力として評価されるようになってきた。

しかしながら、基礎的な「描く」技能はどのように指導されているのだろうか。児童・生徒の自主性を大切にすあまり、技術指導の敬遠が進み、「描く」技能が疎かにされているのではないか。このことについての論争は何十年も前からあったが、最も大切なのは、子どもたちがバランスのとれた美術教育を受けられることにある。美術教育の目標を達成するためには、技術教育、情操教育どちらかに偏るのではなく、児童・生徒の思いを大切にしつつ、表現の基礎的技能をも身につけさせることが求められるの

ではなかろうか。個々の児童・生徒の能力に応じた描画スキルを身につけることで、子どもたちは、自分の思いや願いを込めた豊かな表現ができるようになる。

国立教育政策研究所・教育課程研究センターが児童・生徒の学力の総合的な状況を把握するため、平成21年度に「特定の課題に関する調査」を実施した。図画工作・美術については、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」（図画工作のみ）、「鑑賞の能力」についての調査が実施され、「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果（小学校・中学校）」（対象 小学校6年生（119校、約3,500人）、中学校3年生（104校、約3,300人））が平成23年に公表されている。調査結果については、国立教育政策研究所ホームページで公開されている。

この調査結果のうち、図画工作・美術の学習に対する児童・生徒の意識をより把握することを観念に、以下の4項目（図1～4）について筆者が整理して掲載する。図1において、「図画工作／美術の学習が好き」とであると回答した割合は48%（小6）から35%（中3）と13%減少している。図2～4においては、「生活の役に立つ」「将来の生活や社会に出て役に立つ」「大切だと思う」とついて「そう思う」率が、小学校6年から中学校3年になるとすべての項目において半数以下となっている。この調査における他の設問においても、子どもたちの肯定的な回答は、学年が上がるに従って相対的に低下していることが明らかになっている。これらのデータから、学年が進むにつれて徐々に創造的な活動から気持ちが離れていることが読み取れる。

また、同調査における中学校3年生の結果より、「美術の時間で、スケッチを描くことは好きですか」に対し「そう思う／どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした生徒は56.3%である一方、「自分が思うように絵が描けるようになりたいと思いますか」に対し肯定的な回答をした生徒は90.6%であった。このことから、思うように絵を描くことはできないが、描けるようになりたいという生徒の思いを

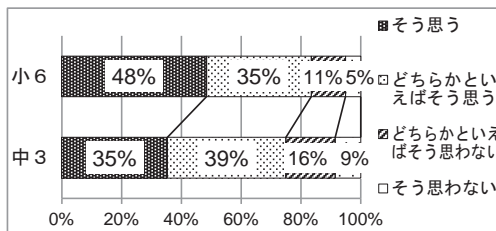


図1 (1) 図画工作／美術の学習が好きですか。

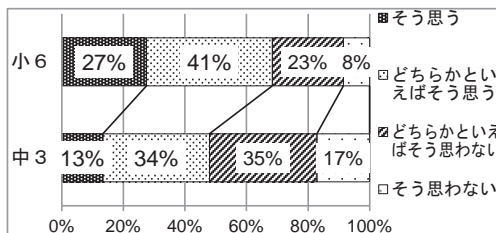


図2 (2) 図画工作／美術の学習は、ふだんの生活に役立つと思いますか。

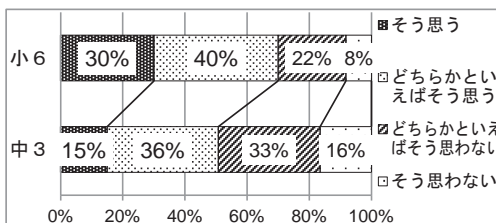


図3 (3) 図画工作／美術の学習が将来の生活や社会に出て役立つと思いますか。

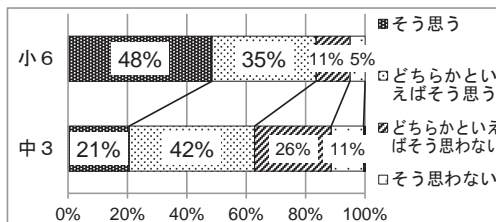


図4 (4) 図画工作／美術の時間は大切だと思いますか。

読み取れる。

確かに、筆者がこれまで小・中学校において勤務し図画工作・美術教育に携わってきた経験からも、小学校から中学校と学年が上がる毎に子どもたちの意識が変容することを切実に感じ

ているところである。その根底には、学年が進むにつれて、自分の表現力を客観視できるようになり、表現に技術的な自信を持てなくなることが挙げられよう。このことを教科の課題として多くの教員が広く認識し、改善に向けた実践に取り組む必要がある。

児童に絵を描くスキルを身につけさせる方法としては、これまで様々な描画法が実践されてきた。しかしながら、これらの指導法は図画工作・美術を専門にしている教師にとっては賛否が分かれるところである。絵の描き方に正解はない。そのため、手順を示し一斉に作品を制作することは美術教育ではないと言わざるを得ない。筆者は「描く」技能は基礎的・基本的なスキルであって、それらを身につけることで、自分の思いを一層豊かに表現することが可能になると考える。

そこで、本稿では多くの実践を重ねたB・エドワーズの論に従って描画指導を行い、児童に「描く」力をつけられるのかを検証し、その有効性と課題について検討する。また、その中で小学校段階の児童に合った指導についても言及する。

2 研究の方法

本研究では、「描く力」をつければ、児童・生徒は絵を描くことに自信を持ち、楽しみ、好きになっていくと考え、「描く」ことを躊躇し始める小学校中学年の児童を対象に、5つの知覚知能(エッジ、スペース、相互関係、光と影、ゲシュタルト)を身につけ、「ものを見る力」=「描く力」を得られると論じているエドワーズの実践をもとに、「描く」力をつけるトレーニングの様々なプロセスを計画的に実施する。そこで、児童の表現の変容について把握・検証を行い、小学校段階の児童に応じた効果的な描画指導について言及する。

3 描画スキルトレーニングを通じた有効な技術指導の検証

小学校中学年段階の児童を対象として、B・エドワーズの著書『脳の右側で描け』をもとに描画スキルトレーニングの一部を実施し、その結果を検証する。

(1) エドワーズの5つの包括的技能についてカリフォルニア州立大学元教授B・エドワーズ(B. Edwards)は、絵を苦手とする一般の人たちに長年に渡り独自の実践を続け、描画スキルトレーニングの効果を実証してきた。その成果については多くの人々が認めるところである。彼女はその代表的著書である『脳の右側で描け』第4版(2013)において写実的な絵を描くための包括的技能として、次の5点を挙げている。

- 1 エッジの知覚…「線」および「輪郭線の知覚」
- 2 スペースの知覚…素描で「ネガ・スペース」と呼ばれるものの知覚
- 3 相互関係の知覚…遠近法とプロモーションの知覚
- 4 光と影の知覚…一般的に「陰影」と呼ばれるものの知覚
- 5 ゲシュタルトの知覚…全体、あるいは「1つのまとまり」としての知覚

これら1～5のいずれの技能も、多少専門的に美術を学んだ者ならば身につけているものである。また、上記のいくつかの技能については、クロッキーなどを行うときに教師が分かりやすい言葉で指導していることである。言い換えれば、上記の5点は何も特別な技能ではなく、児童・生徒の発達段階に応じて身につけることのできる基礎的・基本的技能なのである。彼女は、美術を専門としない人たちにもわかりやすくプログラムされた実践を行い成果を上げている。

(2) 児童Aへの実践

ここでは、エドワーズのこれまでの実践をもとに、小学校中学年の児童に適している描画トレーニングを選択し、5つの技能を効果的に身につけることをねらい実践を行う。

Aは、公立小学校に通う小学校4年生の男児である。幼児期から絵を描くことを好み、小学校低学年頃まで絵を描くことに自信を持ち取り組んでいた。家庭においても自分の好きな絵を描くことが多かった。しかし、学年が進むにつれ徐々に描くことから離れ、ついには描くことを避けるようになってきた。幼い頃に得意であった「お絵かき」が、いつの頃からかうまく描けなくなっていたことに本人が客観的に気づき始めたことが原因である。

以下の図5、6は、Aが小学校2年生1学期と3年生2学期に図画工作の時間に制作した作品である。なお、本研究における作品等についての使用許可については、本人・保護者の了解を得ている。



図5 小学校2年時



図6 小学校3年時

図5の作品は、テーマについて大胆に力強く生き生きと描けており、色彩も鮮やかで自信に満ちている様子である。ところが、図6になると一変して小さく説明的な表現に終始するようになり、水彩絵の具による着色も非常に薄かったり、濁ったりするなど自信の無さが窺える。言い換えれば、自分が絵をうまく描けないことに対して意識過剰になり、絵を描くことへの興味がしおれている状態にあるといえよう。

Aへのトレーニング実施の時期と時間は、平成26年9月から12月まで、おおむね週1回の計11回、1回あたり10～30分程度である。

以下の①～⑪は、対象児童の表現物、反応及び感想を実施順にまとめたものである。なお、①、②については、比較検証のために描画指導を行わず、児童に自由に描かせている。

①自画像 (B5用紙, 鉛筆, 消しゴム, 鏡を使用)

【時間】13分

【反応】今回が初めての取り組みであり、はりきっている様子が見られる。髪、眉毛等は鏡を覗き込み確認しながら描いている。顔の下にある曲線はサインのようなものであるが、まだ余裕があるため自分から描き始めた。

【感想】思ったより早く描けた。面白かった。

②手を描く (B5用紙, 鉛筆を使用)

【時間】8分

【反応】手の形をよく見て描くことはこれまで一度も経験したことが無かったようで、曲げた指の形を捉えることが難しいようである。陰影をつけようとするが、思うようにいかずいららし、声を上げる。まだ時間はある

ことを伝えるが、もうこれ以上描けないと答える。出来上がった作品は周囲に見られたくないような様子を見せる。

【感想】指の形を描くのも、しわや陰をつけるのも難しかった。全然うまく描けないので嫌だ。

③ウォーミングアップ(B5用紙, 鉛筆を使用)



【時間】10分

【反応】タッチの違いに注目して線を描くことを伝えると、勢いをつけたり鉛筆をゆっくり運んだりした。鉛筆の使い方などについて疑問があるときには、質問するように伝えていたため、戸惑うことなく様々な線の描き方に興味を持って取り組めた。

【感想】いろんな線を工夫して描くのが面白かった。簡単にできるので楽しい。

④花びんと顔(B5用紙, 鉛筆, 鏡を使用)



【時間】5分

【反応】人の横顔を意識させることで対称形を描くことに違和感を起こさせることがねらいだが、まさにその影響を受ける。予め描かれている左側の線を右側に反転させて描くのだが、途中からどこまでを描いたのか分からなくなり反転させることが難しくなったため、最後はとりあえず終わらせた形となった。

【感想】鼻の下辺りからどう描いていいか分からなくなり、左の形と同じ様になってしまった。

⑤上下逆さまのデッサン(B5用紙, 鉛筆を使用)

【時間】20分



【反応】始め逆さまの絵を描くことに戸惑っていたため、描いているものが手や顔といった形であるという概念を持たずに、見える線や形をそのまま描くことを伝える。長時間であつたが集中して描き

進め、完成して上下をひっくり返すと手本のデッサンとよく似ていることに満足している様子が見られた。

【感想】こんな難しい絵が描けると思わなかったけれど、ひっくり返してみると意外に元の絵と似ていてびっくりした。

⑥純粹輪郭画(B5用紙, 鉛筆を使用)

【時間】3分×2回

【反応】手のひらのしわを観察しながらゆっくりつなげて描いていく。終了時間まで画用紙は見ないことになっているので、不安そうであるが最後まで描き続けた。



【感想】しわの形をよく見て描こうとした。途中でちゃんと描けているか心配になった。ぐしゃぐしゃで何を描いているのかよくわからない。

⑦ピクチャープレーン(デッサンスケール)を使って手を描く(ピクチャープレーン, 水性ペン, B5用紙, 鉛筆, 消しゴム, 練ゴムを使用)

【時間】25分

【反応】ピクチャープレーンを使うことに興味を持ち取り組む。ピクチャープレーンに手の形を写すことで立体



が平面化され、描きやすくなるのが理解できたようだ。また、補助線を参考に指の長さや形についても正確に描くことができ、完成した作品に満足そうであった。

【感想】ピクチャープレーンに手の形を写す時にペンの先が震えた。指の形や陰をよく見て描けた。本物の（自分の）手とそっくりに描けているのがすごい。

⑧ネガ・スペースを使って草の葉を描く

（ピクチャープレーン、水性ペン、B5用紙、鉛筆、消しゴムを使用）



【時間】25分

【反応】ピクチャープレーンの使い方にも慣れ、手際よく取り組む。対象物の周りの部分であるネガ・スペースについての説明も理解できたようで、B5用紙に描いた後、塗りつぶすことで意識を高めることができたようだ。

【感想】ネガ・スペースを意識して描けた。黒く塗りつぶすのは時間がかかったけれど、難しい葉っぱの形がうまく描けて楽しかった。

⑨ネガ・スペースを使ってイスを描く

（ピクチャープレーン、水性ペン、B5用紙、鉛筆、消しゴム、練ゴムを使用）



【時間】20分

【反応】イスの形とネガ・スペースの両方を確認しながら描き進める。後方に見えるイスの足や座面など、立体的に表現する部分は多少困難を感じたような様子を見せた。そのため、後方の椅子の足はどの部分から見えているか、といったことをこちらから声をかける

ことで一つ一つ確認しながら取り組めた。

【感想】形が難しいところがあった。よく見て描けたのでよかった。

⑩家庭用品を描く（ピクチャープレーン、水性ペン、B5用紙、鉛筆、消しゴム、練ゴムを使用）



【時間】22分

【反応】はさみの厚みなど立体感を意識しにくいようなので、刃の重なり、持ち手の厚みなどに注目させるため、助言を行う。ネガ・スペースを自分で考えて描ける。

【感想】本物のはさみのように描けた。鉛筆や練ゴムを工夫して使うことで、陰の濃いところ薄いところをつけることができた。

⑪自画像（B5用紙、鉛筆、消しゴム、練ゴム、鏡を使用）



【時間】40分

【反応】鏡に引いていた補助線を参考に、頭の上下左右の位置を確認して輪郭を描き始める。目、鼻、口、耳などのそれぞれのパーツの位置や大きさ、形についても鏡を確認しながら描く。陰影については、事前に画用紙全体を鉛筆で中間色に塗っており、光が当たる明るい部分を練ケシゴムで押さえながら表現する。また、暗い部分は鉛筆を横にして使うことで、繊細な調子で陰影をつける。長時間の制作になったため、途中で疲れた様子を見せるが、徐々に完成していく自画像に手ごたえを感じている様子が見られた。

【感想】時間がかかって少し疲れたけれど、自分によく似ているので完成してうれしかった。

(3) 考察

エドワーズの紹介しているスキルトレーニングは上記以外にも様々なものがあるが、今回は小学4年生が取り組めるであろう実践を選択した。Aは写実的な絵を描くための5つの包括的スキルについて、11回のスキルトレーニングを通して初めて学んだ。一番始めの自画像①と最後に描いた自画像②を比べてみても、同じ小学生が描いたとは思えないほど技術面での違いがはっきりと見て取れる。対象児童Aにとって今回の実践は、無くしかけた自信を取り戻せた期間となった。エドワーズがこれまで絵を苦手とする一般の人々を対象とし成果を上げてきたことは、今回、小学校段階の児童にとっても有効であることが示された。

しかしながら、課題についても明らかになってきた。児童Aは、およそ3か月の実践の間、非常に意欲的に取り組んだが、これまでの学校や家庭における経験上、絵は楽しく自由に描くものと認識しているため、本人にとって難しいと思われる課題における技術的な指導には抵抗を示す場面が何度かあった。このことから、発達段階に応じた技能を段階的・継続的に身に付けさせる指導の必要性を感じた。また、低学年の児童にとって長時間の技術指導は心情面において負担となる。できるだけ短時間での指導を心がける必要がある。これらのことから、小学校において6学年を通した無理のないプログラムを作成することが今後の課題となってくる。

4 まとめ

今回の研究では、小学生に描画トレーニングを実践することで、「描く」ことは難しいことではなく、技能を身につけることでそれぞれのレベルにおいて自分なりに満足できることが示された。小・中学校どちらであれ、子どもたちの力は教員が働きかけることで大きく伸ばすことができる。写実的に絵を描く技能について知ることが、彼らに一層幅広い表現を可能にさせるであろう。

図画工作や美術の時間、自分の描いた作品を周りの友達に見られないように恥ずかしそうに隠している児童。「描けない」と思う気持ちが、持っている筆にストップをかけている生徒。これらは、私がこれまで何度も見てきた光景である。その一因として、図画工作と美術の学習内容、また小学校教員と中学校美術科教員の間に、互いを意識した指導がなされていないことが挙げられよう。その解決策としては、図画工作の指導経験の少ない教員にも分かりやすい指導法を紹介するなどの地道な啓発活動が考えられる。また、中学校美術科の教員においても、図画工作で大切にしている子どもの意識の流れについて、今一度考えてみる必要がある。

子どもは自分の思うように描けたら嬉しいし、描ける力を持っている。大人が子どもらしさを求めるあまり、すなわち、技術的に表現しようとする子どもを、子どもらしくないと否定する感覚により、子どもたちに本来必要な指導までも奪っていないだろうか。

今回の「描く」力をつける描画トレーニングの実践が、子どもたちの「描けない」という気持ちを減らすことに少しでも貢献できたら幸いである。そのためにも、図画工作から美術への学習内容の積み重ねが、より子どもの視点で考えられた効果的な学びになることを願っている。本稿では、小学校段階における「描く」力をつける効果的トレーニングに焦点をあて取り組んできたが、対象児童Aのみの実践となったため、このテーマについてはこれからも継続し取り組んでいきたい。

付記

本研究は、平成26年度香川大学教育学部学術基金研究助成を受けた研究の一部として行ったものである。

引用文献

ベティ・エドワーズ著、野中邦子訳(2013)『脳の右側で描け』河出書房新社
小学校学習指導要領解説 図画工作編(2008)

中学校学習指導要領解説 美術編 (2008)

引用資料

国立教育政策研究所・教育課程研究センター (2011)

「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果（小学校・中学校）」(www.nier.go.jp/kaihatsu/tokuteikadai.html)